

News Letter

皆様にとって、鯰（なます）ってどんなイメージでしょうか？「頭が大きくて平たい」「口も大きく歯はおろし金みたい」「噛まれたら痛そう」「ウロコが無くてめめめしてそう」「地震の前に大暴れ？」「食べると美味そう」…等々、独特な雰囲気包まれた、興味深い生きものと感じている方が多いのではないのでしょうか？

今回は、私が幼少の頃から感じていた「鯰の魅力」をご紹介します。

なお、日本でナマズ科に属する魚はナマズ、ビワコオオナマズ、イワトコナマズ、タニガワナマズの4種が知られていますが、ここでは河川、水路、水田などに生息し、分布域が最も広いナマズ *Silurus asotus* が対象です。

①観賞魚としての魅力

鯰の魅力、それは何と言っても頭が大きく全身めめめ感のあるユーモアな体型とかわいいお髭の動きです。とても癒されます。

②釣りの対象としての魅力

子供の頃、初夏の夜に海老名の田んぼにある用水路に行き、鯰釣りをするのが

大好きでした。暗闇の水面から出てきた鯰の風貌は、何か妖怪のような雰囲気があり格別でした。

③秘めた力の不思議

子供の頃、夜行性の鯰が昼間にも関わらず、水槽内で暴れたことがありました。その約3時間後に震度4の地震が起きました。

鯰が地震の前に暴れる現象は昔から観察されていたようですが、鯰が暴れたからと言って地震が起きるとは限りません。しかし生きものならではの気紛れさというか、謎めいているところに魅力があるような気がします。

④鯰文化に触れて

子供の頃、京都の妙心寺退蔵院へ行き、室町時代に書かれた国宝「瓢鮎図（ひょうねず）」の色紙を買いました。この絵は、ある男が瓢箪で鯰を捕らえようとしている不思議な山水画ですが、「つるつるした瓢箪でめめめめた鯰をおさえとることができるか」という禅問答がテーマとなっています。鯰と瓢箪の曲線美や背景の沼、竹、山など自然の描写が素晴らしく、とても癒される絵です。

他にも、江戸時代の安政の大地震の直後に流行った「鯰絵（多色刷りの浮世絵）」には多様な鯰の姿が描かれていて惚れ惚れします。当時、鯰が地下で暴れると地震が起こると信じられていたようですが、鯰絵に出てくる鯰はどこか愛嬌があり、とても魅力的です。

⑤鯰に憧れて…

子供の頃、飼っていた鯰にウシガエル（※）のお玉杓子を与えると、鯰は腹がパンパンに膨れるまで吞み続けました。このときの鯰のお腹もまた、曲線美で癒されました。

当時、私はガリガリに痩せており、そのことがコンプレックスでした。大人になったら鯰みたいにお腹が丸くて美しい体型になりたいという願望が生じました。当時の夢が叶い、今では私のお腹は鯰のようになっています。

しかし、最近受けた健康診断で腹まわりを細くするように指導され、目標値まで設定されてしまいました。

今後は、ウナギに憧れたいと思います。（東京支社 自然環境研究室 柴崎 栄二）

※現在、ウシガエルは特定外来生物に指定され、飼育や生きた状態での運搬、輸入、販売等は一切禁止されています。

巻頭エッセイ

鯰（なます）の姿に魅せられて

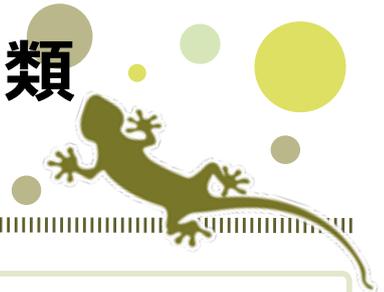


目次

エッセイ	鯰（なます）の姿に魅せられて	1	連載漫画	びっくり！目からウロ子ちゃん	7
レポート	知って守ろう 日本のヤモリ類	2	ある日の	クリ林なのに草っ原？	8
レポート	自然からの恵みで地域活性を試みる	4	フィールドノートから		

知って守ろう 日本のヤモリ類

大阪支社 自然環境研究室 米田 和典



みなさんはヤモリという動物をご存知でしょうか？夜、家の窓ガラスや自動販売機、電柱などに張り付いている平たいトカゲのような小動物です。

ヤモリは、爬虫類のうちヘビやトカゲ類が属する有隣目のヤモリ科に属する仲間の総称です。英語では Gecko (ゲッコー) と呼ばれ、ヤモリ科のうち最も種類の多いヤモリ属の属名も *Gekko* です。元はマレー語らしいのですが、私は勝手に「月光」だと思っています。ちょっと格好いいと思いませんか？

私は山口県西部の出身なのですが、ヤモリのことは「かべちよろ」と呼んでいました。「かべちよろ」という呼称は福岡県を中心とした地域で使われているらしいのですが、可愛らしく親しみが込められた呼称だと思います。「かべちよろ」は、ガやウンカなどの農作物害虫、カやハエなどの衛生害虫、建物を壊すシロアリなどを食べてくれることから、大事にしなければいけない生き物だと子供のころから教わってきました。ヤモリという名も漢字では「宮守(守宮)」、「家守」などと

表記するようで、「お宮や家を守る」という人間の生活に密接し、人間の役に立っていたことがうかがえます。

このヤモリの仲間(ヤモリ科)は全世界で800種以上が存在する非常に大きな種群で、国内では6属14種が存在します。しかしヤモリ類の多くが熱帯～亜熱帯などの気温の高い地域を好む種であり、国内では最も北に分布するニホンヤモリでも秋田県以南、他のヤモリはすべて関西より西または南にしか生息していません。

さらに本州、四国、九州本土に生息するヤモリ類はニホンヤモリ、タワヤモリ、ミナミヤモリ、ヤクヤモリ、ニシヤモリの5種のみで、他は琉球諸島や小笠原諸島などの温かい地方にのみ生息しています。なお、ニホンヤモリは一般的には江戸時代以前に中国大陸から渡来した外来種であるとされていますが、九州西部地方では在来であるという説も存在します。

前置きが長くなってしまいましたが、今回はこの日本本土に生息する5種のヤモリについて、生態や見分け方などを説明したいと思います。



柱の隙間に潜む
ニホンヤモリ
(白い球は卵の殻)

ヤモリの生態

日本本土に生息する5種ともに夜行性で、昼間は樹木や岩場、家屋の隙間に隠れ、夜間活動します。外来種であるニホンヤモリは、灯火に集まる傾向があり、人間も恐れないので住宅地の家屋の壁や窓ガラスなどでよく見かけますが、在来種である他のヤモリは人間を嫌い、主に海岸近くの樹林地や岩場に住んでいます。在来種の中では灯火を嫌がらず比較的集落で見られることが多いミナミヤモリでも、空き家、離れの棟、倉庫、ビルの裏口など人があまり近づかない場所でしか見かけません。人が居る部屋の窓ガラスに張り付いているヤモリを見たら、ニホンヤモリだと

思っただけ間違いありません。またニホンヤモリは内陸部の住宅地などでも見ることが出来ませんが、在来種は主に海沿いの地域に生息しています。

5種ともに餌は主に昆虫やクモなどの無脊椎動物で、その他小さなカエル類、同種の幼体まで目の前で動くものなら何でも食べます。産卵期は夏で、メスが2つの卵を樹木、岩、材木などの隙間に産み付け、その夏に孵化した幼体は2回冬を越すと成熟し、繁殖に参加します。冬眠は樹木や岩、材木の隙間などです。元来暖かい地方の生物なので寒さには弱いのですが、人を恐れぬニホンヤモリは野外よりも暖かい人家などで冬眠できるため、他のヤモリより寒い地方でも生息できると考えられています。

ヤモリの分布

ニホンヤモリ以外の主な分布は以下のとおりです。

タワヤモリ：瀬戸内海周辺と四国南部の太平洋側

ニシヤモリ：長崎県西部と五島列島

ミナミヤモリ：九州南部から沖縄諸島

ヤクヤモリ：九州南部から屋久島

上記は主な分布域ですが、近年ヤクヤモリが長崎県や和歌山県、ミナミヤモリが高知県、神奈川県、静岡県などで確認されるなど、自然分布であるのか人為的な拡散であるのかわからない個体群も報告されています。

ヤモリの見分け方

5種の見分け方として注目すべき点は肛門の左右にある側肛疣（そっこうゆう）と呼ばれるいぼ状構造の鱗の数、背面、四肢、尾の大型鱗の有無です。これら識別点の各種における状況を表に示しました。

ヤモリの識別点

種名	側肛疣の数(対)	背面の大型鱗	四肢の大型鱗	尾の大型鱗
ニホンヤモリ	2~4	有り	有り	点在
ミナミヤモリ	1	有り	無し	点在
ヤクヤモリ	1	有り	無し	背面中央部に1対の大型鱗が並ぶ
ニシヤモリ	1	有り	有り	点在
タワヤモリ	1	無し	無し	無し

Point

側肛疣：雄では大きく顕著ですが、雌では小さく見えにくいことがあります。

四肢の：前肢でははっきりしない大型鱗 ことが多いので後肢で確認することをお勧めします。

ニホンヤモリ (*Gekko japonicus*)

背面の大型鱗は他の種に比べ小粒。



側肛疣は2対

背面と四肢に大型鱗が点在

ミナミヤモリ (*Gekko hokouensis*)

ニホンヤモリより背面の大型鱗は大きめですが、ニホンヤモリによく似ています。



写真提供 谷岡 仁 氏



背面に大型鱗が点在するが四肢にはない

側肛疣は1対

写真提供 谷岡 仁 氏

ヤクヤモリ (*Gekko yakuensis*)

尾が比較的長く体色は腹面が黄緑色。背面も黄色味を帯びています。



背面に大型鱗が点在するが四肢にはない

側肛疣は1対

尾の背面に1対の大型鱗が並ぶ

ニシヤモリ (*Gekko* sp.) ※学名未定

腹面は鮮やかな黄色。かなりごつごつした雰囲気です。



背面、四肢ともに大型鱗が点在

側肛疣は1対

タワヤモリ (*Gekko tawaensis*)

大型鱗が無いいためすっきりした感じを受けます。



背面と四肢に大型鱗が無い

側肛疣は1対

ヤモリ類の現況

日本本土に住む5種のヤモリのうちニシヤモリは発見されたのが1988年で、まだ正式な学名が付いておらず、詳細な生態や分布も判明していない種です。またヤクヤモリ、タワヤモリは環境省のレッドデータブックによって、それぞれ絶滅危惧II類、準絶滅危惧に選定されています。そのほかの種も都道府県のレッドリスト、レッドデータブックなどで絶滅のおそれがある種として選定されています。

しかし一方で、ニホンヤモリとミナミヤモリは国立環境研究所の侵入生物データベースでは国内外来種として選定されています。人間の近くに住むこの2種が、自動車や船舶、材木などの人為的な移動によって生息域を広げ、競合により他の在来ヤモリの生息域を狭めています。また在来ヤモリの主な生息環境である海岸近くの崖地、露岩地は、崩落の危険性があるため、従来コンクリートで護岸されてきました。コンクリートで覆われ、岩場の大小の隙間が消失するとヤモリ類は生息できません。このようなことから在来ヤモリの生息環境は徐々に狭まっています。



これまで、ヤモリ類が生息する海岸近くの崖地や露岩地のような特殊な環境に生態系が存在していることはあまり知られていませんでした。そしてこのような希少な動物の生息が把握されることなく開発が進められてきました。

日本は地震大国であり、津波対策などやむを得ない部分はありますが、落石・崩落対策としてコンクリートではなく金網ネット等を用いることや、コンクリートを使用する場合でも隙間の多い環境を創出するなど、ヤモリ類の生息環境を維持する対策を今後提案していきたいと思えます。

自然からの恵みで地域活性を試みる

九州支社長 中武 禎典



皆さんは、CSVをご存知でしょうか？

使い勝手の良いカンマで区切ったテキストデータではありません。

マイケル・ポーター教授らによって提唱されたCSV（Creating Shared Value：共有価値の創造）は、企業が社会のニーズに対応することで、経済的価値（企業の利益）と社会的価値（課題の解決）をともに創造しようとするアプローチです。日本では、古くからあった近江商人の経営哲学のひとつである三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）にもつながる考え方です。

今回は、私の東北支社在任中に、当社の理念やスキルに大変よくマッチしたかたちで携わることができたCSVの活動についてお話しします。



社鹿半島の林内

地方の里山、中間山地が抱える多くの課題

私は職業柄、地方の里山、中間山地の自然を調査することが多く、現地を踏査しながらこのように考えていました。

- 自然環境は比較的豊かだけど、人が少ないね、若い人もいないね。
- 目立った産業は農業などの第一次産業だね。
- 最近では二ホンジカなどの食害も多いね。場所によっては食害が酷いね。
- 森林は、植林地は間伐できていないし、薪炭林は放棄され株が大きくなっているね。

悪い点ばかりを挙げてしまいましたが、ちなみに私も地方出身者で田舎が大好きです。

「地方の里山、中間山地の自然の恵みを使った商品で地域を活性化しながら自然再生を行えないだろうか…」

すると以前、二ホンジカによる食害で林床植生が極端に貧弱になっている山林に、妙にウリハダカエデが多かったことを思い出しました。シカの角研ぎで傷ついた樹皮に、樹液を求めるカブトムシ、クワガタ、カナブン等が大量に集まっていました。あまりの群れ具合に若干引いてしまうほどでした。

そこから、以下のアイデアを思いつきました。

- 二ホンジカの不嗜好性植物の傾向があるウリハダカエデを使ってメープルシロップを採取製造・商品化（6次産業化）し、目新しい日本産メープルシロップで地域活性化につなげられないか？

- メープルシロップの作成過程に必要な燃料は、放棄された薪炭林の再生で出る木材やスギ・ヒノキ植林の間伐材で賄えないか？
- スギ・ヒノキ植林は、ウリハダカエデを使って針広混交複層林化し、メープルシロップの生産林にできないか？
- あわよくば、森林に人手が入ることでニホンジカへの忌避効果が発生し食害が減り、生物多様性が向上するのではないか？同様に薪炭林の再生やスギ・ヒノキ植林の間伐で生物多様性が向上するのではないか？
- 加えて当社のECサイトでシロップを販売できないか？

提案書は社内を無事通過。当社代表取締役から「東北支社で取り組んでみなさい」とOKが出ました。

この提案を、2015年から牡鹿半島を中心に地域・まちづくりを行っている一般社団法人おしかリンクさんが快く引き受けてくださいました。おしかリンクさんとはある事業で知り合い、金華山等のエコツアー、その他の牡鹿半島を利用した観察会を合同で実施していました。

日本産メイプルシロップで地域を活性化

フィールドとなった牡鹿半島は、宮城県内でもニホンジカの頭数が多く、宮城県が2007年2月に牡鹿半島南部の黒崎で調査した結果では、生息密度は52頭/km²となっています。自然植生にあまり目立った影響が出ない密度とされる3～5頭/km²をはるかに上回っていることがわかります。エコツアーや観察会を通じ、林床の植被率は低いもののウリハダカエデが比較的分布していることは把握していましたので、初年度は、事業の情報配信を兼ねたエコツアーを兼ねて3つの課題に取り組みました。



東日本放送取材・撮影



森の健康診断



ウリハダカエデ探索 温度ロガー設置

課題①：ウリハダカエデの探索をしよう

最初のエコツアーは2017年の初冬に実施しました。参加者は10名程度で、おしかリンクさんの「やまのみ」に集合し活動の趣旨を説明。その後早速、山に向かいました。

途中、ヒノキ植林地で「森の健康診断」を実施し、牡鹿半島の状況、ニホンジカの生態などを解説しつつ、目的の場所に行きウリハダカエデを探索しました。1時間程度の探索の結果、比較的大きなウリハダカエデだけで13本（胸高直径φ27.5～13cm）が見つかり、φ10cm未満のものも多数確認されました。

課題②：樹液採取時期

一般的に採取時期（樹液が出始める時期）については、「雪が残っている早春で、夜間は気温が氷点下になり日中は4～9℃程度になる日」と言われています。

そこで、5地点に温度ロガーを設置し、石巻と女川の気象データと比較することで樹液採取時期を検討しました（図-1）。現地のデータは回収の都合上、2月3日までですが、牡鹿半島で採取時期に最も適しているのは、2月上旬～3月上旬と推定されました。ほぼ1ヶ月の季節ものです。

課題③：ウリハダカエデの樹液を採取してみよう

樹液採取は2018年2月25日に実施しました。ウリハダカエデの探索と同様に、集合後、活動の趣旨を説明。東日本放送さんの撮影が入り、後日「ライブキニナル」で放送されました。

参加者は、取材陣も入れて15名。使用する道具は電動ドリル、コック、シリコンチューブ、ポリタンクです。参加者全員で協力し、山に向かいます。

ポイントに到着すると早速、我先にと参加者の皆さんが電動ドリルで幹に穴をあけます。穴をあけた瞬間

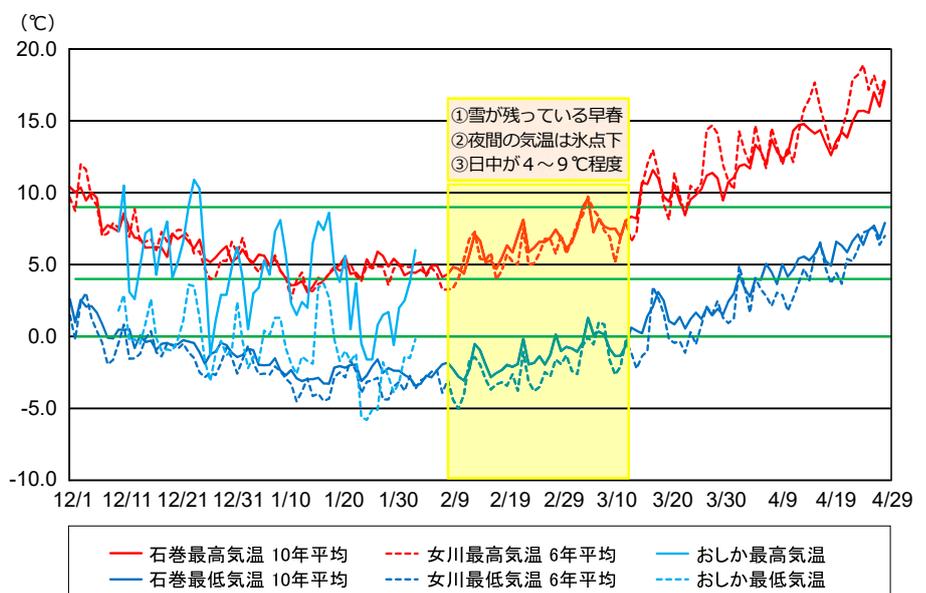


図-1 石巻、女川及び牡鹿半島の最高気温と最低気温



あけた穴から流れ出る樹液



幹に穴をあける



コック、シリコンチューブを設置



ポリタンク設置



シリコンチューブ内を流れる樹液

から樹液が流れ出る様子を、皆さんは驚いていました。また、その樹液を指で取ってもらい味わってもらうと、そのほのかな甘さに皆さん感動していました。

最後に、コック、シリコンチューブ、ポリタンクを接続し、完了。シリコンチューブ内を樹液が伝います。

シロップを煮詰める。ひたすら煮詰める。さてその味は…

先行して設置していたポリタンクを回収し、「やまのぬ」に持ち帰り、メープルシロップを作ります。併せてメープルティーも作ります。

メープルシロップは、糖度 66% になるまでひたすら煮詰めます。メープルティーは、樹液が半分程度になるまで煮詰めます。

1 時間半ほどで完成です。メープルシロップはパンケーキにかけ、メープルティーは紅茶仕立てにしました。はたしてその味は・・・

想像していたより甘味が強く、ほんのり樹木の香りがあり、正直、相当においしかったです。説明が下手で申し訳ありません。もう少し上手く味や香りを言葉でお伝えしたいのですが、味の言語化は難しいですね。

その後もウリハダカエデを種子から育てたり、挿し木に挑戦したりと、試行錯誤をしながら前進を続けています。本年はすでに適期の 2 度のメープルシロップの採取

①回収した樹液を鍋へ

※焦げないように注意しながら 1 時間～2 時間くらい煮詰めていきます。



②糖度 66% 以上になるまで煮詰める

※糖度計で糖度を確認しながら煮詰めます。



③完成

※メープルティーは樹液が半分程度になるまで煮詰めたものを紅茶に溶かします。



と賞味のツアー、苗の定植を行いました。

地域活性と自然再生を心に描いて

取り組みはまだ始まったばかりで、これからも一つ一つ課題を解決しながら進めていくことになるでしょう。

活動にご興味のある方は、当社のウェブサイトまたはおしかりんくさんのフェイスブック (<https://ja-jp.facebook.com/oshikalink/>) をご覧になり、ぜひご参加ください。

当社は生物多様性の保全を中心に、自治体や企業等、様々な主体が社会や環境との「三方良し」の関係を築くためのお手伝いを生業としていますが、この取り組みは、それらの仕事にも大いに活かされるに違いありません。

成果が出るまでに時間のかかる事業ですが、将来、牡鹿半島が活性化し森林が再生した姿を眺めながらメープルシロップのスイーツを食べることを楽しみにしています。



びっくり目からウロ子ちゃん



博士の運転で
森林公園まで
行くんです

ムホホホ

あ、道路の上を渡って
いる小さな橋は
何ですか？博士

おー、あれか？あれは
アニマルパスウェイじゃ
アニマルパス？

パスウェイ、
じゃあ、ちよと戻って橋の
たもとで一服しようか。



タヌキたちが道路で轢かれちゃう(ロードキル)のを防ぐトンネルみたいなものですか？

正解 行動範囲が広がると食べ物が得やすくなるのと同時に重要なことがもうひとつ

森を道路で分断しちゃうと横切れないヤマネたちは恋人(繁殖相手)に会えなくなってしまうわけじゃな。



そう、結果狭い範囲で交配が進むとその地域の種が絶滅しやすくなる可能性も、それを防ぐ、ということもあるん

なるほど！じゃあ「種を守る橋」でもあるわけですか？

当初はロープを渡すだけで動物たちが利用するだろうと思っ実験したんじゃが...

やっぱりロープだけでは限られた種類の動物くらいしか利用できないようじゃの(注2)



ヤマネたちが渡ってる最中にはフクロウなどの捕食者にマル見え

キャー 待って、いいのよ楽だわ

ウム、まったくそのとおりじゃ。そこで研究者たちは安全に渡れるように工夫を凝らしたんじゃ。



しかも昼夜利用できて長持ち安全な橋を、もちろん下を通る車に対しては頑丈な構造物でなければいかん。「愛の架け橋」をつくるのも試行錯誤の連続なんじゃ。(正面図)

目からウロコ!! 動物がただ道を渡るだけじゃあないんなんですよ!

道路でヒトが便利な分、動物たちにも配慮しなくちゃって事ですよ!



「愛の架け橋」を探して、おたもんじゃ

あうい、途中大蛇やら何やら討ち払って、あ、遂に向こう岸に着いたんじゃ!!

やたあ! それでそんで愛の行先は? **No ひえん** それだったら大蛇に食べられた方がまだマシじゃな。博士え(涙)

監修: 園田陽一 (地域環境計画 東京支社), 協力: 一般社団法人アニマルパスウェイと野生生物の会, 絵: 飯塚要

ニオイタチツボスミレ



人の営みが創り出す景観「長谷（ながたに）のクリ林」

能勢町の町花 ササユリ



私のお気に入りのまちの一つ、大阪府の最北端にある能勢町では、不思議な景観をみることができます。それは、里山の山裾の疎らな木々の下にある、「バリカン」で髪を刈り上げたような場所です。

この「刈り上げ」がみられる場所は、実は栗を栽培している「クリ林」です。能勢町は「銀寄（ぎんよせ）」という有名な栗の産地で、山裾の至る所に銀寄のクリ林が広がっています。

能勢町では、クリ林は民家と裏山の境界部分や、里山に入っていく山裾に多く作られました。これは、かつて人々が里山へ薪などを調達しに行く際に、手近のクリ林に立ち寄ってクリの管理や収穫を行うための工夫だったようです。それが能勢町独特の景観を創り出しているのですね。

そして意外かもしれませんが、このクリ林は現在急速に失われている、生きものが豊かな「草っ原」になっているのです。

能勢のクリ林では通常、田植え前（5

ある日のフィールド・ノートから

クリ林なのに
草っ原？

月）と盆前後（8月）の年2回ほど草刈りが行われます。草刈りの理由は、クリの木の世話をする時やクリの実を収穫する際、草が生えていると作業の邪魔になるためです。この毎年行われる草刈りによって草っ原が維持され、今でもクリ林ではたくさんの草地特有の植物（草原生植物といえます）を見ることができます。

まずスミレ類。春のクリ林では数多くのスミレの仲間が花を咲かせます。タチツボスミレやニオイタチツボスミレが最も多く、シハイスミレも見かけました。黄色がまぶしいキジムシロやミヤコグサもたくさん生えていました。

クリ林には、いわゆる「希少種」に指定されるような珍しい草花も生えています。例えば、大きく美しい花を咲かせるササユリです。昔はたくさんササユリが生えるクリ林もあったようで

す。ササユリは能勢町の町花でもあり、シンボリックな花です。キンランやヨツバハギも珍しいですね。オケラも、最近はめっきり少なくなったようです（私が植物を学び始めた10年程前には、すでに珍しい植物になっていました）。

能勢町は、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社が全国の自治体を対象にして選定した「生物多様性に優れた自治体ランキング」で1位になるなど、国内でもトップクラスの生物多様性を有している町です（関西の昆虫好きのメッカでもあります）。

クヌギやコナラの里山からクリ林（草っ原）へ、さらにそこから平野の水田へと繋がっていく…この多様なランドスケープの連続性は能勢町の生物多様性の源であり、自然を生かした人々の営みにより形作られてきたものです。

みなさんも是非、能勢特有の景観とクリ林の植物を見に、能勢町へ行ってみてください。

（大阪支社 生物多様性推進室 上村 晋平）

News Letter No. 45 2019年4月

【発行】……………株式会社 地域環境計画

● 発行人……………高塚 敏

● 編集……………中山香代子・釣谷佳子・岡崎康代

・永沢敦子・渡邊由佳・亀井光子

素朴な疑問やご感想などお寄せください。お待ちしております。E-mail: nl-info@chiikan.co.jp

株式会社
地域環境
計画

生きものと共生する
地球づくりのうた
ちいかん

■ 本社 ■ 東京支社 ■ プロダクト営業部

〒154-0015

東京都世田谷区桜新町 2-22-3 NDSビル

TEL : 03-5450-3700

<https://www.chiikan.co.jp>

■ 北海道支社 TEL : 011-717-8001

■ 大阪支社 TEL : 072-684-3182

■ 東北支社 TEL : 022-772-6651

■ 九州支社 TEL : 092-833-5270

■ 名古屋支社 TEL : 052-760-2822

運営サイト

鳥獣被害対策商品の専門店

鳥獣被害対策.com <https://www.choujuhigai.com>

屋外防犯用品の販売サイト

Fieldsaver.com <https://field-saver.com>

自然を伝えるプロダクション

Nature Clips <https://nature-clips.com>

先日、メープルシロップをつくる「採取と賞味」というエコツアーに参加してきました（詳しくはP4～6をご覧ください）。当日は天候に恵まれず、雪がちらつく中、樹液がたくさん採取できそうなウリハダカエテを探して樹液回収用のポリタンクを設置しましたが、寒すぎて樹液が出ませんでした。幸い、賞味用のシロップは事前に設置していたポリタンクで採取できていたので、煮詰めてパンケーキと共に美味しくいただくことができました。その次の開催ではたっぷり採取ができたとのこと。私、晴れ女のはずなんです…残念です(笑)。来年は採取のリベンジということで。皆さんも、私と一緒に参加してみませんか？（永沢 敦子）